

三軍和せずんば、以て戦いを言い難し。百官和せずんば、以て治を言い難し。
 書に云う。「寅を同じゆし、恭しきを協えて和衷せん哉」と。唯だ和の一字、治乱を一申す。
 『言志四録』 佐藤一斎
 (訳文) 全軍が和合しなければ、戦争は口に難い(戦争は出来ない)役人全体が和合しなければ、よい政治は出来ない。

國の支え

(題字揮毫・中井信夫元大阪府議会議長)

関西防衛を支える会
 (略称・関防会)
 〒540-0012
 大阪市中央区谷町2丁目7番6-605
 TEL 06-6947-0831
 発行人 高橋季義
 編集人 新川貞敏
 印刷所 (株)新聞印刷

第4号
 (秋季号)
 平成12年10月1日(日)
 (皇紀2660年)
 (大正紀元89年)
 (昭和紀元75年)

中国は日本の南西諸島を狙っている

海軍は日本の南西諸島を狙っている

尖閣諸島は厳然たる日本の領土

近ごろ中国の海洋調査船の噂をよく聞く。それが日本の南西諸島に出没する、というのだ。日本の領海を侵した、そういつて政府が抗議する、などなど。

尖閣諸島は日本の厳然たる領土である。その事実を確認した西村代議士の義挙も、そのような文脈で行われたはずだ。

しかし、日本の新聞では、それ以上の詳しいことを我々に伝えてはくれない。つまり地政学的な文脈を。

亀井浩太郎氏の最近の文章が、その文脈を教えてくれた。「西の脅威に備えよ」がそれである。「明日への選択」の八月号に載った。この月刊情報誌を御存知ない読者もいよつかと思つて、簡単に紹介しておきたい。

「諸君!」や「正論」といった評論雑誌にさらされる紙数はすくなくない。その分、気楽な評論が少なく、限られた数の重要問題を厳選、それぞれの分野の第一人者が解説を加えている。私も目を付けてもらうことがしばしばである。

たとえば、金正日がどうした、こいつしたといつてお祭り気分の、「精神的に武装解除」された韓国を、きびしく批判した西岡力氏の一文など(七月号)。

冷戦が終わった。米国の戦略が大きく変わった。ロシアは米国の主要な脅威でなくなつた。かわりに中国から朝鮮半島、ことに中国の海洋進出が注目を集めつつある。日米安保も、これに伴い、根本的にその性格を変えた。

かつてはロシアの北方からの脅威が、日米安保の眼目だった。ソ連軍が北海道を侵襲する可能性、である。具体的には、我が自衛隊の大きな部分が北海道に釘づけになっていた。それは誰でも知っている。それが変わった。自衛隊の主力は、今後、日本のもっとも西の地域、九州地方に配置されるのだ。

北方からの脅威ではなく、西方からの脅威になつて、西方からの脅威になつた。

中国の脅威に対しては、米国は日本を直接助けることにはない。中国海軍による小さな紛争や侵襲に対しては、「日本が独自に対処せよ」というのが米国の意思だ。そう亀井氏は書く。

これまでアナタマカセ(四十六年憲法の前文・第九条)だった日本の政府に、そのような決意が果たしてあるのか。

威ではなくなつた。かわりに中国から朝鮮半島、ことに中国の海洋進出が注目を集めつつある。日米安保も、これに伴い、根本的にその性格を変えた。

かつてはロシアの北方からの脅威が、日米安保の眼目だった。ソ連軍が北海道を侵襲する可能性、である。具体的には、我が自衛隊の大きな部分が北海道に釘づけになっていた。それは誰でも知っている。それが変わった。自衛隊の主力は、今後、日本のもっとも西の地域、九州地方に配置されるのだ。

北方からの脅威ではなく、西方からの脅威になつた。

中国の脅威に対しては、米国は日本を直接助けることにはない。中国海軍による小さな紛争や侵襲に対しては、「日本が独自に対処せよ」というのが米国の意思だ。そう亀井氏は書く。

これまでアナタマカセ(四十六年憲法の前文・第九条)だった日本の政府に、そのような決意が果たしてあるのか。

たとえば、金正日がどうした、こいつしたといつてお祭り気分の、「精神的に武装解除」された韓国を、きびしく批判した西岡力氏の一文など(七月号)。

冷戦が終わった。米国の戦略が大きく変わった。ロシアは米国の主要な脅威でなくなつた。かわりに中国から朝鮮半島、ことに中国の海洋進出が注目を集めつつある。日米安保も、これに伴い、根本的にその性格を変えた。

かつてはロシアの北方からの脅威が、日米安保の眼目だった。ソ連軍が北海道を侵襲する可能性、である。具体的には、我が自衛隊の大きな部分が北海道に釘づけになっていた。それは誰でも知っている。それが変わった。自衛隊の主力は、今後、日本のもっとも西の地域、九州地方に配置されるのだ。

西方の脅威を思念せよ

相談役(東アジア研究専攻) 鈴木満男

中国の脅威に対しては、米国は日本を直接助けることにはない。中国海軍による小さな紛争や侵襲に対しては、「日本が独自に対処せよ」というのが米国の意思だ。そう亀井氏は書く。

これまでアナタマカセ(四十六年憲法の前文・第九条)だった日本の政府に、そのような決意が果たしてあるのか。

たとえば、金正日がどうした、こいつしたといつてお祭り気分の、「精神的に武装解除」された韓国を、きびしく批判した西岡力氏の一文など(七月号)。

冷戦が終わった。米国の戦略が大きく変わった。ロシアは米国の主要な脅威でなくなつた。かわりに中国から朝鮮半島、ことに中国の海洋進出が注目を集めつつある。日米安保も、これに伴い、根本的にその性格を変えた。

かつてはロシアの北方からの脅威が、日米安保の眼目だった。ソ連軍が北海道を侵襲する可能性、である。具体的には、我が自衛隊の大きな部分が北海道に釘づけになっていた。それは誰でも知っている。それが変わった。自衛隊の主力は、今後、日本のもっとも西の地域、九州地方に配置されるのだ。

は国政の全般にわたるのだが、私の目に特に気がかりに映るのが、国防面におけるそれだ。

中国海軍の海洋進出

シナは大陸である。シナの帝国の中央政府は、歴代、おおむねシナ大陸の四周を、辺疆を守ってきいてきた。それが変わった。辺疆を守るのは、もう、辺疆を「外に張出す」政策をとりはじめた。

南シナ海において、中国が、近年しばしば東南アジア諸国に対して強引な態度を示すようになった。台湾、それだけではない。台湾諸島によって、大きく制約されている。

それを日本との関わりについていえば、大隅海峡(九州と種子島の間)は狭いが国際海峡だから通れる。外に、沖縄、宮古島間が公海。与那国島と台湾の間が公海。つまり、中国の艦船が通れる場所は三つしかない。

しかし、通れるといつても海峡の幅は狭い。いざという時には抑えられるかも知れぬ。そこを、いつでも自由に通れるようにしようと思えば、中国はどうするか。自国の領土にするか、つまり占領するしかない。亀井氏はいう。

「宮古島、石垣島、西表島といった先島諸島は欲しいですね。本当は沖縄が欲しいのだ」ところで、沖縄は、露骨にいえば米国領といつてもよいから現在の現状である。

中国が、尖閣諸島まで中国領だ、と宣言したのが平成四年。大陸棚も安全保障上必要だと言いつたのが昨年平成十一年である。

さて、中国がその「辺疆を外に張出す」とは、具体的にどういふことか。中国海軍の海洋進出である。いつまでもなく。

ところが、中国という国家は、海洋に対して「開かれていない」。その太平洋への出口は、台湾の存在によって、またわが国の南西

諸島によって、大きく制約されている。それを日本との関わりについていえば、大隅海峡(九州と種子島の間)は狭いが国際海峡だから通れる。外に、沖縄、宮古島間が公海。与那国島と台湾の間が公海。つまり、中国の艦船が通れる場所は三つしかない。

我々日本人が、現下の東アジアの地政学上の重大問題に、どんなに無知で不勉強であるか。この一事が証する。

以上、亀井浩太郎氏の「西の脅威に備えよ」の要点を紹介した。

以下は亀井氏の論にはないもの、三十年來の台湾研究者としての私自身の蛇足である。

さて、上に述べたような中国海軍の海洋進出に対して、日本と台湾の両国は利害を共通にする。これは見やすい道理だ。

経済援助を中国に対してつづけてきた。やっと最近、その経済援助が中国の軍備増強に使われるという、途方もない、とはいえ或る意味では、当然の可能性に気づき、さすが暢気な日本政府もあわてはじめた様子である。

当然だ。敵に塩を送った結果、自分の首を自分で絞めるような結果になるからだ。

日本がそのような意味で援助する相手があるとするれば、それは中国ではなく台湾でなければならぬ。

しかも台湾には、かつての台湾総督府時代の統治を高く評価する人々が、まだ相当数残っている。他人に

教えられたのではなく、自分の体験を以て自分の親日感情を真付ける人々は、現在すでに六十歳代の後半以上である。しかし、その後が韓国とは違ふ。台湾の人々は、政府(蒋介石の国民党政府)が、学校教育と言論機関を通じて施した反日宣伝に、貫して抵抗した。そして自分たちの親日感情を毅然と維持した。まことに有難い人々なのである。

私の若い友人、陳培豊君の例を挙げよう。陳君の経験では、学校では先生が、日本人がどんなにかしつちに帰つてその話しをする、大人たちは「そんな馬鹿なことがあるものか」と一笑に付する。だから学校での反日教育は効果をあげなかった。無論、そうでもなかった場合も少なからずあったことを、私は自身の現地調査から知っている。にもかかわらず、台湾人は、その若い世代、戦後の反日教育を受けた世代も含めて、実に多くの親日感情を抱いている。これまた私自身の体験の証するところである。

われるが、諸君はいかがお考えだろうか。(平成十二年八月十八日)

これまで台湾に対して、この態度である。私には、考えた。平成十二年八月十八日

陸上自衛隊 記念行事のご案内
 中部方面隊創立40周年記念行事
 *場所: 陸上自衛隊伊丹駐屯地
 伊丹市緑ヶ丘七一一一
 電話 〇七二七-八二一〇〇〇
 阪急電車、JR東西線「伊丹駅」各駅より送迎バス運行
 *日時: 平成十二年十月十五日
 *時間: 午前十時三十分開始

新年号掲載広告のお願い
 名刺広告他
 3.7 cm x 6.5 cm = 5,000円
 5.0 cm x 6.5 cm = 10,000円

交通至便・駅前・一泊五五〇〇円税サ込
 ビジネスインナンバ
 〒556-0011 大阪市浪速区難波中一―一
 TEL(06)6644-7771
 FAX(06)6644-7770

死んでたまるか!!
 抗ガン作用のあるβ-グルカンがアガリクスの3倍!!
 ~免疫力を高めます~
 ハナピラタケ含有食品
 花珊瑚
 資料送呈
 代理店 株式会社 日生工研
 大阪市福島区吉野4-27-12
 TEL(06)6462-8528
 FAX(06)6462-5824

株式会社サンワ運行委託
 送迎バス運行代行の安心と信頼の責任集団
 大阪 〇六(六九九三) 五六四五
 神戸 〇七八(六五二) 五六四五
 代表取締役 山本 覺
 〒570-0032 大阪府守口市菊水通二―一九―一
 〒652-0806 神戸市兵庫区西柳原六―四

代表取締役 山本 覺
 〒570-0032 大阪府守口市菊水通二―一九―一
 〒652-0806 神戸市兵庫区西柳原六―四

国境の街、満州里

シベリア鉄道の要衝チタを北狄とする国境の街、満州里。ノモンハンの戦場より約二百キロの北にある。この満州里で私は昭和十一年に父兵吉、母チヨセの晩婚の長男として生まれた。父は明治二十四年に長崎県南高来郡土黒村で生まれ、大正三年頃に渡満したと...

九日、ソ連軍侵攻

満州の夏は朝が早い、午前三時頃には黎明を迎える。ソ連軍が満州に侵攻した八月九日、夜明け頃に銃砲の音が聞こえる中、父は子供たちを起しに来た。レンガ造りの家だった。窓ガラスがパツ、パツと銃弾で放射線状に割れるのを見て父は「じゃがめ」といった。父母が落ちていたのを恐ろしさを感じなかった。

この時代は、明治四十四年の辛亥革命により清朝の故地、満州には政府高官が逃れ、また韓人が耕作地を求めて陸続と流れ込んだ、混沌とした時代である。父の渡満は、日露戦争後の国策である対滿移民政策に奨励されたものかもしれない。近所の二家族と共に我が家の地下室に入った。白系露人の奥さんを持つ家族三名と満鉄職員の家六名と我が家の親子五名の計十四名だった。満鉄職員の家は主人は勤務で居なかった。この地下室は二十畳くらいの高さは二メートル以上あった。元はパンを焼く部屋だったらしく煙突と大きな換気孔があり、父はこの換気孔を使って夜中に水汲みをしていた。ローソクをつけての食事は一升瓶につめた焼米であった。排尿は部屋の中央付近にあった団扇裏のようなところにしたが強制換気はなく、臭かった。

満州里国民学校

昭和十八年、満州里市左滿国民学校に入学した。生徒は、当時日本人だった朝鮮人と我々だけで、満人、韓人はいなかった。生徒数が少ないため、二年が同じクラスの複式授業で高等科も設置されていた。一日の始まりは、全校生徒が校庭に整列、国旗掲揚して朝礼を行い、その後、学校の向かいにあったロシア正教の寺院を一周するのが日課だった。この年中行事も厳寒零下四十度の凍る真冬は大変だった。走り終わって教室に入ると何人かの手は凍傷で、全員がしばらく両手を擦って暖めた。暖房のスイッチに手を直接かざすと炎症をおこすので先生はそのつど注意していた。

父、ソ連兵に連行

八月十二日の早朝、水汲みに行った父が帰って来て「上にソ連兵が来ている、今度は生きて帰れないだろう、それで、お母さんの言うことを良く聞いて、兄弟なかに良くしていかんだよ」と言って、隣の主人と階段を昇って行った。私たちが後から上がって見ると、上の店舗に大男のソ連兵十二、三人が自動小銃を構えていて、そのまま連行されてしまった。後で、判ったのだが、十五才以上の日本人は全員(最

孤児となって帰国

うことを良く聞いて、兄弟なかに良くしていかんだよ」と言って、隣の主人と階段を昇って行った。私たちが後から上がって見ると、上の店舗に大男のソ連兵十二、三人が自動小銃を構えていて、そのまま連行されてしまった。後で、判ったのだが、十五才以上の日本人は全員(最

は流弾で心臓を貫かれ即死。弾は背中の赤ちゃんの左腕を貫通し泣きやまないで、兄弟二人で赤ちゃんを絞め殺す事件もあった。私たちが後から上がって見ると、上の店舗に大男のソ連兵十二、三人が自動小銃を構えていて、そのまま連行されてしまった。後で、判ったのだが、十五才以上の日本人は全員(最

私の昭和二十年八月

常任理事 長田雅恵



死者は二メートルくらいの深さの穴に無造作に積み重ねられ、屍の陰に潜んでいた。死体の手足が露出して、乱射の威嚇射撃に殺されるような恐怖を感じた。ソ連兵は武器を隠してないか、と家捜しにきたのだが、片端から銃剣の先端で突き、引っ繰り返した。ソ連兵の後について入ったところ、四歳七ヶ月の妹が「死にたくない」と狂ったように泣き叫びだした。このため母は心中を断念した、そのお陰で今日、私は生きている。しばらくすると集団生活の呼び掛けがあり、持てるだけの荷物をもって、皆のところへ引越した。母の知恵であるが、夏の引越した真冬の衣類を持たされた事が、晩秋の逃避行に役立ったのです。こうして、満人漢人の略奪を受け、街に残った婦女の子だけで集団生活が始まり、食糧はトウモロコシの粉に夏野菜を炊き込んだ雑炊が三度の食事となった。この塩味だけの雑炊に病人と子供は消化不良を起し、体力を消耗して、やがて死亡していった。夜になると、私たちが三、四人でソ連兵の強盗に備えて不寝番をした。闇の中にソ連兵を見付けると「来た、来た」と小声で連呼して皆に知らせた。

悲劇の始まり

高齡八五才、ソ連のチタ市まで連行された。地下室に隠れ潜んでいる間に戦闘は終り、静かになってきた。しかし、八月九日に私の同級生も女子二名が流弾で亡くなり、二名が貫通銃創で重傷を負った。また前途に悲観して母心中をさせた家庭もあった。赤ちゃんを背負った母親

死は二メートルくらいの深さの穴に無造作に積み重ねられ、屍の陰に潜んでいた。死体の手足が露出して、乱射の威嚇射撃に殺されるような恐怖を感じた。ソ連兵は武器を隠してないか、と家捜しにきたのだが、片端から銃剣の先端で突き、引っ繰り返した。ソ連兵の後について入ったところ、四歳七ヶ月の妹が「死にたくない」と狂ったように泣き叫びだした。このため母は心中を断念した、そのお陰で今日、私は生きている。しばらくすると集団生活の呼び掛けがあり、持てるだけの荷物をもって、皆のところへ引越した。母の知恵であるが、夏の引越した真冬の衣類を持たされた事が、晩秋の逃避行に役立ったのです。こうして、満人漢人の略奪を受け、街に残った婦女の子だけで集団生活が始まり、食糧はトウモロコシの粉に夏野菜を炊き込んだ雑炊が三度の食事となった。この塩味だけの雑炊に病人と子供は消化不良を起し、体力を消耗して、やがて死亡していった。夜になると、私たちが三、四人でソ連兵の強盗に備えて不寝番をした。闇の中にソ連兵を見付けると「来た、来た」と小声で連呼して皆に知らせた。

この頃、母は前途を悲観して、我々子供に「一緒に死のう」と話しかけてきた。連行された父は生きて帰る可能性はない。子供心にも現状では生きていくのは難しい、と思ひ

か、来る日も来る日も晩秋の満州の荒涼とした草原の旅は、寒く、ひもじく、辛いものだった。突然、枯草の草原の真中に停車して、動く気配もない。すると、どこからともなく物売りが現れる。そしていつ発車するのか、皆目見当のつかない連行であった。

満州里を脱出

生まれ故郷、満州里を出たのは十月の中頃であった。ハイラル、ハルビン、新京の経路で十月末に奉天に到着。集団生活の我々婦女子の一団が奉天行き有蓋貨車になぜ乗車できたのか、経緯は不明である。し

父帰る

私は無事、祖国の土を踏む事ができたのである。

弟妹とも生き別れに

母は二十一年二月に、父は三月に奉天で亡くなった。栄養失調で体力を消耗した上に発疹チフスを患っ

奇跡的な出会い

途中、新京市で三泊したように思う。この新京の室町国民学校で、父の商売を手伝っていた長田大作さんの次男が亡くなった。長男は天折しているが、私とは、ふたれ兄弟になる。大正三年生れの叔父さんは満州里から再召集され、南支方面の部隊にいたようだ。女、子供だけの満州里逃避行組は次の目的地、奉天に向かった。新京、奉天の中間に四平街市がある。この混乱の中で、この四平街駅で大作叔父さんと奇跡的な出会いをした。

祖国の土を踏む

両親と死別し、弟妹と生別した私は、子供を亡くした大作叔父さん夫婦の庇護を受けるようになり、錦州に移り、さらに山東半島の先端にあるコロ島に入った。叔父さんはそこで米軍の荷役をして帰国便を待っていた。二十一年六月、十歳になった私は叔父さんに連れられて、かろうじて祖国の土を踏んだ。母の姉が長崎市内に住んでいたため、取り敢えずこの伯母の家に連れられて行った。少年期、親戚の家を転々として過ご

た為だった

父の死後、弟妹は支那人に買われて行った。父は幼い弟妹がこの混乱の中で保護者なしに生きて行くのは無理と判断したのではないかと。大人でも露命を繋ぐのが難しい時代である。父は私の事を、大作叔父さんに「この子だけでも日本に連れて帰ってくれ」と頼んでいたようだ。中国残留孤児の報道があれば、衰弱して歩けない弟妹がマーチョ(馬車)に乗せられて行った姿が臉に浮かび、今も眼を凝らして消息を求めている。

私の昭和20年8月

相談役 中島 元

私はその日を、生れ故郷の旧満州国奉天市(現中国遼寧省瀋陽市)で迎えた。十五才、旧制中学二年の時である。

程なく、家の前の大通りを武装解除を受けるために西に向かう関東軍を泣きながら見送った。戦車、高射砲その他...軍国少年の塊だった私は、こんなに武器があるなら、もっと戦えばよいではないか、と口惜しかった。しかし、それから数日後、後を追うようにして入ってきた連軍を見て腰を抜かすほど驚いた。

のぞき見している二階の窓に迫るような大戦車。これまで見たこともない巨大な代物だ。傍らを行進している兵士は全員が自動小銃を手にしている。

一カ月前、大連から招集された従兄弟が来て「見て御覧、ゴボウ剣もいまや竹光だよ、これじゃあなあ」と嘆いていたことも思い出され、とてもじゃないが、これじゃひとまりもあるまいと思われられた。

同時に、また私は、いよいよ大変なことになった、これからいったいどうなるのだらうという危機感の予感のどろどろとしたまま消息の判らない父のいない今、長男として母や姉妹たちをしっかりと守らなくてはならないと悲壮な想いに胸を締めつけられるようになった。

国家の後ろ盾を失ったあとで尚、旧植民地で生きて行かなければならぬ者の

中「大部隊集結中、侵攻必至」と緊迫した情報が寄せられていたにもかかわらず「ソ連侵攻はないものと認む」と記し、侵攻の報を聞いて「我、判断を誤り」と書いていたとか!。怖いこと、困ること、目をつぶって見ないこと、起きないことと考える幼児性は、この頃の軍指導部に日常的に見られたことよ

今日の自衛隊はあくまでも専守防衛、我が領域内において、国民の安全を確保しつつ外敵を撃退しなければならぬのである。例えば少数の敵なりとも、いったん上陸を許すと、これに対する対応は極めて難しいものとなる。市民の安全に配慮しながら敵を制圧するには、一般警察事案における人質立てこもり事件のように小火器の使用すら制限される事となる。できるだけ水陸での撃退がベストであることは云までもないが、海岸線の長い我が国にとって、これは、ほとんど不可能に近い至難事である。

周辺諸国からきな臭い動きがしきりの今日、直接有事は今にも起こり得る事態とらえ、一日も早く、真に国民を守るための、実際に即した作戦、装備、訓練、関係諸機関との意思疎通、緊密な連携の保持、そして何よりも国内での防衛活動の法制の整備を急がなければならぬ。

自衛隊の将領諸賢は、この事が実現しなければ、外敵の侵攻に対して自分たちは何の動きも取れない存在であることを、為政者を始め、国民すべてに向かつて、ありのままに訴えるべきではないだろうか。

これは今年になって初めて知った事だが、当時、参謀本部の作戦総括者(?)が日記の中に、現地から頻々と「ソ連軍大挙東進

負の決断を重ねるな

8月15日、満州国奉天の自省より

五十五年前、私は二十歳、江田島にある海軍兵学校の一号生徒(第三学年生徒)で自らを鍛えると共に、四月に入校した三号(二年生)の教育に情熱を燃やしていた。当時、密かに記録していた私の貴重な日誌から抜粋する(最近、書簡整理中に発見)。八月十五日、当日はカッターで遊泳訓練に出ている事を付記する。

海兵一号生徒の終戦

「デマタ、デマタ!」坂田方例ノ刺撃ノ顔デ林シゲニ俺ニ「本当ラシイヨ」トイフ。「ソナナ馬鹿ナ!嘘タ!冗談ニモソナナコトヲ云ウト承知シネエゾ!」怒ッテ此声ヲ出シタ後ハ沈黙。タガ段々ト騒然トシテキタ。

「デマタ、デマタ!」戒メラレタ。ススリ泣キノ声。無念!泣キ声ガ次第ニ多ク且ツ大キクナッタ。ポロポロ止メヨウモナク出ル。口惜シ涙。「ラバウルハドウナルンダ。特攻ハ!特潜ハ!」口カラ奔走シル。生徒館へ坂田、越智ト一纏メアッタ。皆立ッ気サエ失ッ

こうして四国方面出身生徒が懐かしい故郷に向かつて江田島を後にしたのは八月二十一日の事であった。真な気持ちは出ていると思記録は翌十六日から十七日

私の昭和20年8月

会長 高橋季義

テベッドニ顔ヲ埋メテイタ。泣キ面ハ腫レテイタ。何タル事カ!天皇ヲトリマク重臣ヲノ腰拔ケ奴!ナニモカモ終ワッタノカ。死ノウカ。人間生キ甲斐無ク生ケル程惨メナモノハナイコトヲ初メテ知ツタ。父ノ顔、母ノ顔、浮カシメタル人達ハ皆泣顔ダ。死又ニハ時ト

場所ヲ選バネバ、モウシバラク待テ。日本!祖国!焼土ノ中カラ立上ガルノ

陸上自衛隊 八尾駐屯地46周年記念 場所:八尾 空港 電話:〇七二九一四九一五三二 日時:平成十二年十一月十九日 記念式典 午前十時から JR大和路線「志紀駅」下車

陸上自衛隊 信太山駐屯地43周年記念 場所:和泉市伯太町官有地 電話:〇七二五一一四一〇〇九〇 日時:平成十二年十一月三日 午前十時から JR阪和線「信太山駅」下車

自らの無力を晒けだす事は辛いことかもしれない。しかしだからと言って何事も、できなかったこと、やったこととして問題を先延ばしに回避する、かつての軍隊の幼児性の弊を繰り返すことには許されまい。

さる八月二十六日、二七日に当会は小松基地航空祭への見学研修旅行を催しました。二六日朝、好天に恵まれバスは大人二八名、子供二名を乗せて大阪を出発し、途中、東尋坊と那谷寺の観光を済ませて宿泊地の片山津温泉、白山荘へ夕刻到着しました。

機などが編隊飛行で頭上を通過した後、この航空祭の最大の目玉である、世界有数の戦闘機F-15 Jの展示飛行が開始されました。参加された方の大勢は旅客機しか見たことが無かったため、世界最強といわれる戦闘機の機動性を目の当たりにした。体感できただけで見学の価値があった、との声をいただき企画した者として嬉しく思います。また、あの機動性を見られた方には納得していただけではないと思いますが、戦闘機のパイロットには相当な重力(最大八倍)が掛かる為、身体に計り知れないダメージを受けることは有名です。F-15は米国で開発されてから約二十年前で湾岸戦争などの実戦に投入されましたが、唯一の機も撃墜されたことが無いそうです。これは映画などでは絶対に体感できるものではありませぬ。この衝撃波をまた、救難ヘリによる

小松基地航空祭を見学

事務局長 前田 稔

へ立ち寄り、会の名称が入った湯飲みを記念として各人一個ずつ頂き、土産物店では、皆さん海産物など沢山の買い物をされました。車内では皆さん、お疲れのようでしたが、参加者が航空祭で購入した航空自衛隊の

ビデオを食い入るように見られ「この戦闘機が数時間前に目の前を飛んでいったんだ」と感嘆の声が聞こえてくるなか、全員無事帰阪しました。末筆になりましたが、この研修旅行企画後の七月四日、不幸にもブルーインパルスが訓練中に墜落し三名の尊い命が失われました。その為、小松基地を始め年内は総ての展示飛行が中止となりました。九月十日現在、ブルーインパルスの訓練飛行は再開されていません。地上から見れば華やかなアクロバット飛行隊も操縦しているのは生身の人間だということ、改めて認識させられました。殉職された操縦士に謹んでお悔やみ申し上げます。

天皇の放送、雑音 で聞き取れず

編集長注のタイトルは「私の昭和二十年八月十五日」というのであった。おもしろいのだが、この私の程度では聞き取れず、表題をひとひねりしてみた。

さて、その括弧つきの「八月十五日」である。この日も炎天下の行軍だった。師団司令部から、正午に陛下の御座られたら送があるとの伝達されていた。「玉音放送」という呼び方は、のちの事だと思われ。昼食時の小休止の間に三号無線で電波を捉えようとしたが雑音がひどくて聞き取れなかった。しかし、気になるところでもなかった。いずれ全軍、国民に対する激励のお言葉にちがいないと見ていたからである。

部隊は南京に 向って前進中

私は第三十四師団歩兵第二十八聯隊本部の曹長で、師団は米軍の大陸東攻を想定した支那派遣軍の新配備により、いわゆる中支の三角地帯・南京、上海、杭州方面に布陣するため、南京方面に布陣中。去年初夏から大陸打通戦以來、湖南、広西の両省域に展開して来た隷下の兵力をまとめ、北上を開始して来た。既に二カ月が経っている。事態のおよそを知ったのはその晩、あの嵐が遠景に望める南甯鉄道沿線の小呂徳安に程近い森のほとりで露営に入ってからである。

軍直轄の独立支隊というものは、軍の作戦命令でも情報電報のなかでも師団並みに扱われ名前が出る。ときには「ノースサイド」あるいは「無条件降伏」が正しいと、おいおい判ってきたが、そうなるかと納得しかねる。そこが強い。「敗れたくないのに、なんで降参しや」と幕布の外で古参兵の一人が喚くのが聞こえ、やがて泣き声に変わった。太平洋戦域の概況は一兵に至るまでのみこんでいたが、原子爆弾の情報はまだ伝わらず、満州の惨状も知らずにいた。

大陸打通戦で めざましい働き

「敗れたくないのに」というのは事実である。昭和十三年三月、大阪師団の管下で編成された、わりに新しい師団だが、現役兵中心の編成で古参の第三師団(名古屋) 第十三師団(宇都宮)と、ともに第十一軍の虎ノ子と謂われた。殊にわが聯隊主力は去年五月から大陸打通戦(公称一号作戦、武漢以南の第二期の通称湘桂作戦)に十九月の間、軍直轄の支隊編成でめざましい働きをした。殊に衡陽、桂林の攻略に加わり、バナナの美る柳州まで進んだ。

米軍の直接指導で重慶軍が湖南の中核とした衡陽の攻防戦は、のちに戦史家の伊藤正徳が「昭和の旅順戦」と呼んで嘆息しているが、一城市の攻防に四十日という戦いは大陸の戦線では例を見ない。

「生きたぞ」の 感覚が湧き出る

当然、犠牲も多かった。

「生きたぞ」の 感覚が湧き出る

当然、犠牲も多かった。

「8月15日」を超えて

歴史が正しく伝えられていくこと

作家・元産経新聞論説委員

瀬川 保

「生きたぞ」の 感覚が湧き出る

「生きたぞ」といふのは、戦時中特有の感覚である。戦場の最前線に身を置くと、生死の境をさまよっている。死はいつでもそばにあり、一瞬の不注意で命を失ってしまう。そんな状況の中で、生き残ることが、一種の奇蹟である。この感覚が、戦時中の人々を奮起させた。そして、戦後、この感覚が、日本人の血に染み渡り、戦後復興の原動力となった。

「東京裁判」 デタラメだった

「東京裁判」は、戦後最大の国際法廷審判である。しかし、この裁判には多くの疑問点がある。特に、被告の選定や証拠の扱いが、公平性を欠いていると指摘されている。また、判決の内容も、戦時中の実情を十分に考慮していないと批判されている。このように、東京裁判は、歴史の正しさを伝えるという点では、決して成功しなかった。

日本軍の仕業と 宣伝して回る敵

戦時中、日本軍は国内で「大東亜戦争」の必要性を説き、国民の士気を鼓舞した。一方、海外では敵国に宣伝活動を行い、戦況を偽装して、国民の士気を下げることを目指した。このような活動は、戦時中の重要な戦術の一つであった。しかし、戦後、このような活動は、戦時中の実情を正確に伝えるという点では、決して成功しなかった。

同胞間の争いも 広大な国では

日本は、地理的に広大な国である。このため、戦時中、各地で同胞間の争いが発生した。特に、戦況の悪化に伴って、食糧不足や物資不足が生じ、地域間の格差が拡大した。このような争いは、戦時中の重要な社会問題の一つであった。しかし、戦後、このような争いは、戦時中の実情を正確に伝えるという点では、決して成功しなかった。

我が師団はなお も武装を解かず

戦時中、師団は常に戦備を整え、戦況に応じて行動した。戦後、師団はなおも武装を解かず、戦況に応じて行動した。これは、戦時中の実情を正確に伝えるという点では、決して成功しなかった。

柳川保氏の 回顧録

柳川保氏は、戦時中の重要な戦術の一つであった。彼は、戦時中の実情を正確に伝えるという点では、決して成功しなかった。

第3回定時総会の御知らせ

日時：平成十三年二月十八日(日曜日)
会場：新阪急ホテル(大阪梅田)
時間：午後四時から総会
午後五時から防衛講話
講師：佐藤守氏(元空将)
午後六時～八時まで懇親会
* 詳細は新年号に記載します。

「生きたぞ」の 感覚が湧き出る

「生きたぞ」といふのは、戦時中特有の感覚である。戦場の最前線に身を置くと、生死の境をさまよっている。死はいつでもそばにあり、一瞬の不注意で命を失ってしまう。そんな状況の中で、生き残ることが、一種の奇蹟である。この感覚が、戦時中の人々を奮起させた。そして、戦後、この感覚が、日本人の血に染み渡り、戦後復興の原動力となった。

我が師団はなお も武装を解かず

戦時中、師団は常に戦備を整え、戦況に応じて行動した。戦後、師団はなおも武装を解かず、戦況に応じて行動した。これは、戦時中の実情を正確に伝えるという点では、決して成功しなかった。

柳川保氏の 回顧録

柳川保氏は、戦時中の重要な戦術の一つであった。彼は、戦時中の実情を正確に伝えるという点では、決して成功しなかった。

同胞間の争いも 広大な国では

日本は、地理的に広大な国である。このため、戦時中、各地で同胞間の争いが発生した。特に、戦況の悪化に伴って、食糧不足や物資不足が生じ、地域間の格差が拡大した。このような争いは、戦時中の重要な社会問題の一つであった。しかし、戦後、このような争いは、戦時中の実情を正確に伝えるという点では、決して成功しなかった。

日本軍の仕業と 宣伝して回る敵

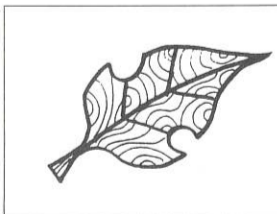
戦時中、日本軍は国内で「大東亜戦争」の必要性を説き、国民の士気を鼓舞した。一方、海外では敵国に宣伝活動を行い、戦況を偽装して、国民の士気を下げることを目指した。このような活動は、戦時中の重要な戦術の一つであった。しかし、戦後、このような活動は、戦時中の実情を正確に伝えるという点では、決して成功しなかった。

「東京裁判」 デタラメだった

「東京裁判」は、戦後最大の国際法廷審判である。しかし、この裁判には多くの疑問点がある。特に、被告の選定や証拠の扱いが、公平性を欠いていると指摘されている。また、判決の内容も、戦時中の実情を十分に考慮していないと批判されている。このように、東京裁判は、歴史の正しさを伝えるという点では、決して成功しなかった。

「生きたぞ」の 感覚が湧き出る

「生きたぞ」といふのは、戦時中特有の感覚である。戦場の最前線に身を置くと、生死の境をさまよっている。死はいつでもそばにあり、一瞬の不注意で命を失ってしまう。そんな状況の中で、生き残ることが、一種の奇蹟である。この感覚が、戦時中の人々を奮起させた。そして、戦後、この感覚が、日本人の血に染み渡り、戦後復興の原動力となった。



編集後記

この号の編集にあたっては、多くの関係者の協力があった。特に、柳川保氏をはじめとする関係者の貴重な資料や情報を提供してくれたことに感謝する。また、この号の内容は、戦時中の実情を正確に伝えるという点では、決して成功しなかった。